九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

壇一雄の福岡高校時代

長野，秀樹
久留米大学附設高等学校教諭

https://doi.org/10.15017/15476

出版情報：文獻探究. 24, pp.11-20, 1989-09-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

檀一雄の福岡高校時代

長野　秀樹

本稿では、おもに檀一雄の旧制福岡高校（現在の九州大学教養部）在学中の伝記的な問題について扱いたいと思う。だが、その前に順序として、檀の福岡高校入学前までの生活について簡単に述べておきたい。

檀が生まれたのは、明治四十五年二月三日、山梨県南都留郡谷村町五五六番地においてである。父参郎三十一歳、母トミ十九歳の第一子長男である。ただ、この地が檀にとって、父祖の地というわけではない。父の本籍地は福岡県山門郡沖端村大字沖端八一番地（現在の柳川市）であるし、母の出身も同じく福岡県三井郡国分村（現在の久留米市）である。同じ筑後地方出身の両親を持つ檀が山梨県で生まれた理由は、参郎が蔵前工業学校（現在の東京工大）出身の技師で、当時山梨工業試験所に勤務していたからである。その後、檀の一家は、父の転勤や、その他の理由により、福岡や青森、父の実家等に居所を変え、檀が福岡高校を受験した時には、栃木県足利市に住んでいた。

この間の檀の生活に最も大きな影響を与えたと思われる事件は、大正三年、檀、九歳の折の母の出奔であろう。トミが家を出る直接の契機になるのは、ある医学生との恋愛事件であるが、その事件以前から、夫婦の間に亀裂が生じていた。原因はトミが再婚（参郎と結婚する以前、トミは、東大に在学中の学生と結婚したが、夫は東京在住で、姑や小姑と折り合いが悪く三週間程で別れた経験があった）だということを、参郎が承知しないままに結婚し、後にそれを知らされたためだという。そういう状態の時にトミの、東京商科大学（現在の一橋大学）在学中の弟が結核性股関節炎に罹り、その看病の手伝いをしてくれた、下宿の隣室の医大生と恋愛関係に陥り出奔したのである。もっとも、これは檀の側からの回想であり、トミの回想に依れば、出奔の原因は、その医大生との仲を邪推した参郎が、看病に行かせてくれず、遂には日本刀まで持ち出して脅迫した為で、医大生とは出奔の後、一方的に結婚を迫られただけだという。[注1]

具体的には檀自身は、その間の事情について次のように回想している。[注2]

私が、母の情事に立ち会った時は、数え年ようやく、十歳であり、もちろんのこと、男女の交合のことを知らず、いや男女の間に自然とかもし出されてゆく恋愛の感情の何であるかをもはっきりとは意識しなかったが、それでも、母とその医科大生の異常な昂奮の状態だけは、感知した。

不快を感じたのである。

私の嫌悪の情が、何らかの道義の観念によってささえられたものでないことは申すまでもない。

私は母の身体のなかに、なにものか蠢動する異物がひそんでいると信じないわけにはゆかなかった。その異物は平素の母の聡明と、均衡とをことごとく狂わせて、母の心身をそのまま波のようにもてあそぶのである。その夫と四人の子供を棄て去る

ぐらいのことは至極当り前のことだ。

彼女はその異物の部分で、むしろ、神につながっているのである。

このように檀自身は母の出奔の原因を、母の恋愛事件に求めて、この他にも、母のその医大生宛の恋文を見たことがあり、その手紙には短歌がしたためてあったとも述べている。檀の言い分と母の言い分と、どちらが正しいか、にわかには断じ難いが、少なくとも、檀が母の出奔の原因を、母の恋愛と捉えていたことは間違いない。もっとも、この回想の後半部の感想自体は、とても九歳の少年が自分の母の恋愛を、これほど客観的に理解することは不可能であろうから、明らかに執筆時の感想ではある。ただ、檀は、この文章の最初で「私が自分の母のことを書くにあたって、あらかじめ特筆しておきたい一点がある。それは幼少から私は母を（もちろんのこと父を…）自分の部外者と見做していたと云うことである。」と述べ、さらに、「私は私の母を、女性の中の稀に見る賢者だと信じているし、母のすべての出来事を、とりとめない生命のまどわしの中で、さながら幻影と見えるまでに豊麗に生き抜いた先達者の鼓舞とも激励とも感じているが、しかし私は、母子が一本にゆわえられて、そのまま判別出来にくいような哺乳期乃至幼年期を持ち合わせた記憶がない。私は好むと好まざるとにかかわらず自分の母を母と見る前に、先ず女性と見るように慣わされたのだ。」と、母を、肉親としてではなく、一人の女性として見る視点を早くから獲得していたのだということを強調している。

このような視点を少年期に獲得していたということ自体が、檀の特異な成育歴を物語っているし、いわば、檀は母から〈拒否〉された少年であったわけだが、その代償として檀が手にいれたものが、肉親をも客観化する視点と、次のような母と子の〈物語〉であったのである。[注3]

母が父の家をはっきり出ていったのは大正十年の十一月だ。

もみじが真赤に染っていた。母は私に鹿の絵のついた薄い雑記帳を一冊買ってきてくれて、その雑記帳の第一頁に「艱難爾ヲ玉ニス」と書き入れた。その意味を説明しながら、獅子がその子を谷底につき落す話も聞かせてくれた。

最後に、「母さんは、ここのお家を出ていきます。もう、あなた達とは永久に会えないけれども、いつでも、あなた達の仕合わせのことは神様に祈っておきます」とそんなことを言った。

母は盛装しており、唇に口紅をつけていた。さすがに三人の子供との袂別は辛かったのであろう。しばらく泣いた。

しかし、私は母の成行を自然に納得した気持から、何もとめだてはしなかった。母は生後やっと一年の末の妹だけを自分の背に負って、いさぎよく家を出ていった。

送ってくるなと母が言うから、私と妹二人は裏山の寺の畑に立って、母の姿が長い大門の道に消えて行くのをいつまでも見送った。

この回想を先に〈物語〉と述べたが、もちろん、現在では、この別れの場面が、現実としては、どのようなものであったかを確認するのは不可能に近いだろう。母親の証言とは食い違いがあるのは確かである。[注4] ここでは母との別れの場面をこうした、美しい〈物語〉として創り上げたのが、この回想を書いている作家ではなく、一人の少年であったに違いないということを確認しておけば、それでよい。

このようにして、母と別れた後、檀は父と暮しながら、旧制足利中学（現在の足利高校）を四年で修了し、旧制福岡高校文科乙類に

昭和三年に入学する。足利中学の校友会誌である「遺響」第三号（昭和二年十二月）に依れば、第一回卒業生中、高校進学者は九名。第二回卒業生六十名中、高校進学者は四名。両期合わせて、四年修了後の高校進学者はわずか七名である。（檀は五年で卒業していれば、第四回卒業生である。）この様な事実は檀が秀才であったというエピソードの一つとして問題はないが、なお残る疑問は、何故、檀が進学する高校が、他ならぬ福岡高校でなければならなかったのかという疑問である。「遺響」に依れば、足利中学から進学する生徒のほとんどが関東の高校に進学している。その中で、檀のみが遥か福岡の高校を選んでいるのである。確かに福岡は、檀にとって、故郷と呼んでいい土地かも知れない。

しかし、その地が、檀にとってそれ以上の意味を持つのは、そこには、出奔した母が住んでいたのである。檀が、どの時点で福岡に母が住んでいると知ったのかは詳かではない。本人の言を信じるならば、高校合格後に、父親から知らされたということだが、確証はない。あるいは、檀が福岡高校を選んだ理由の一つに母がそこに住んでいるということもあったのかも知れない。[注5] とまれ、檀は自分達を残したまま出奔した母が、福岡の地に住むことを承知して福岡高校に入学するのである。

檀の母トミは参郎と正式に離婚した後、離婚に当って、世話になった、貿易商で、また、クリスチャンでもある高岩勘次郎氏と再婚して、福岡市浄水通八九四番地に住んでいた。高岩氏も、夫人を病気で亡くし、子供達の世話の必要もあり再婚相手を探していたのである。昭和一三年七月発行の『福岡市縦横詳細地図第九版』（銀洋社）に依れば、市内電車古小烏電停より、福岡女子商業高校の横を抜けて、平尾浄水場に向かう一角に高岩の名が見え、この家が母親の家であったと考えてよいだろう。この古小烏の電停から西に向って、五つめの電停が檀の通う、高等学校前電停である。こうした、目と鼻の距離に住みながら、檀の在学中、二人は正式には対面していない。トミも檀が福岡高校に在学していることは知っており、母方の祖父の友人の教師を介して、対面させようという話もあったが、檀の方からそれを断ったという。だからといって、檀が母親を無視していたというわけでもない。[注6] 始めて、母親を見掛けた時の様子を、檀は次の様に回想している。

私達はゆっくりと母の後ろを追った。次第に道は登り坂である。平尾の山にさしかかる。母はその頂上の真新しい邸の中に入りこんでいった。私は「黒岩」（高岩の改変か――引用者注）という表札を確かめると、そのまま、同伴の女学生達を追いあげるようにして、平尾の浄水地の山に登っていった。

＜中略＞

時折、母の家から、母が庭先に歩み出してきて、対山の私達をいぶかしそうにみあげている。

私は誇らしかった。まるでキリストのように「看ヨ、汝ノ子ナリ」と呼ばわってみたい程の気持である。相手の女学生が二人であったから、まさか私は彼女らを誘惑することは出来なかったが、しかし、ここならどんな破廉恥な行為も許されると、一途に私は思いあがった。

高岩を黒岩と改変するなど作品の上での作為はあるだろうが、ここには六年ぶりに母と再会した気持の高揚が、そのまま回想されているように思う。特に、「看ヨ、汝ノ子ナリ」と呼び掛けたいという檀の姿は美しい。このようにして、母との再会（檀の側からの一方的なものではあるが）を果した檀は、その後もこの裏山から度々、

母の姿を遠望したり、時には近くの女子高生とのデートの場として、使ったりしたともいう。

さて、檀の福高在学中、母との関連で最も大きな事件はトミの夫、高岩勘次郎氏の衆議院議員選挙立候補であろう。このことについて檀は次のように回想している。[注7]

正直を言うと、私の生母が私の一〇歳の頃、家出をして、福岡の平尾の貯水池のあたりに家を持ち、その夫が、代議士選挙に立候補したという噂を聞いた。いや、その選挙演説があり、私の実母も応援演説をやると新聞紙上で知ったから、私は何となく、会場にだけは言ってみようという気になった。

その会場に出かけるのに手ぶらでは何だから、ピストルを持参して行ってみたらという、ただの思いつきを、実行に移したまでの話である。Oがピストルを持っていることをはっきり知っていたからだ。

ここにも、出奔した母親に対する複雑な檀の心情が表われていると思われるが、そのことについて述べる前に、高岩勘次郎の立候補の経緯について当時の福岡日日新聞によって、確認しておきたい。

高岩氏が立候補したのは、昭和五年一月二十一日に衆議院が解散され、同年二月二十日に投票が行われた第十七回総選挙であり、選挙区は福岡一区である。高岩氏はこの選挙に、中立系の候補として、民政党の中野正剛らと共に立候補している。定員四名で、全立候補者九名のうち、第七位で落選している。第四位当選の簡牛凡夫氏の得票数が、一万五千余票。高岩氏の得票数は千票足らずであるから、泡沫候補というのは酷であろうが、政友会、民政党の二大政党時代に、両党に属さない立候補では、落選は、いたしかたないというところだろう。立候補の理由については、トミは「与えられる演説の機会に、中国各地で見聞した隣国の実情や、先進諸国への認識を市民に訴えたいため」であったと述べている。[注8] 実際、高岩氏は上海を中心として、かなり手広く貿易を営んでおり、立候補の一面にこのような側面があったことも事実であろう。

当選の可能性の少ない候補であるから、新聞の記事も少ないが、それでも、二月八日付「福岡日日新聞」は、「夫人が留守師団長格、高岩氏事務所」と見出を付けて、つぎのような記事を載せている。

中間新道ピチウマルス工業事務所と住居をスツカリ選挙事務所に充て、若い美しい高岩夫人が留守師団長格で美しい声で電話の応対にも立てば墨汁点々たる看板書きの手伝ひもし、ビラ作りに手も糊に汚すけなげな応援振りに運動員、事務員を（一字不明――引用者注）め手づから激励している図は美しいものに見えた。

檀がこの記事を見たという確約はないが、「福岡日日新聞」は当時福岡の最有力紙であるし、その可能性は高いと思われる。もし、檀がこの記事を目にしていなくても、恐らくは、他の新聞記事の論調にもこうしたものが多かったのではないかとも思われる。つまり、高岩氏より、むしろ、その夫人であるトミに焦点を当てたような記事である。トミは高岩氏よりも一六歳若く、しかも美人でもある。そうした夫人の方が当選の可能性の低い候補者よりも、読者の興味をひくであろうという判断が、なされたとしても不思議でもないだろう。

そして、ここで問題になるのは、そのような事実よりも、そうした記事を見た檀の心情であるのは、いうまでもないことである。自分達を残して、出奔した母が見ず知らずの男の「若く美しい」妻として衆議院選挙に臨もうとしている。恐らく檀は、こうした事実から、母が無事で、社会的にも信頼される人物の妻として、幸せに暮

していることを喜ぶというよりも、むしろ、嫉妬に近い感情を持ったのではないだろうか。短銃を持って、演説会場に乗り込んだといっても、むろん、撃つつもりなどなかった、と述べている檀[注9]だが、短銃でも持っていなければ、トミと高岩勘次郎氏の演説する姿など直視することができなかった、というのが偽らざる心境ではなかったろうか。

いわば、現実の母と出会うことで、母の出奔以来、檀が創り続けてきた、〈母の物語〉は、崩壊することになるのである。たとえ、母が、衆議院選挙立候補者の妻という社会的にも認められる存在であったとしても、（むしろ、そうであったがために）檀が、母と別れた日から創り続けてきた、〈物語〉が崩壊せざるをえないのは必然であるだろう。ここで、檀は再び、母に〈拒否〉されるのである。こうした、二重の拒否が、檀の心理に複雑な影響を与えたであろうことは想像に難くない。その一つの表れが、この〈短銃事件〉とでも呼べる、出来事であったろうし、正式に再会するのを、拒みながら母の家の裏山を、女学生とのデートの場所として利用したりといった、行動となったのであろう。

このような母との関係は、例えば、「美しき魂の告白」（「鶴」昭和九年七月）や、「花筐」（「文藝春秋」昭和十一年五月）などにも、顕著な影響が見られるが、それについては、稿を改めることとして、次に、学生共済部事件と、それにまつわる二度の停学処分について述べたい。

この事件については、先に相馬正一氏により、『学生思想事件一覧』を元にした、論が成され、それにより事件の基本的な動向や性格は、明らかになっているが[注10]、その他の二、三の資料を使って、いくつかの点について、指摘しておきたい。

『福岡高等学校学而寮史』（同編纂委員会編・昭和二十四年十月）に依れば、共済部問題とは、共済部設置を公約として当選した、生徒総務石橋弥左衛門に対し、学校当局が、設置を認めなかったことに、端を発した同盟休校事件である。石橋は文二乙在籍で、このクラスに檀も在籍していた。共済部とは、前書に掲載されている「共済部規約草案」によると、「生徒ノ経済生活ノ安易及ビ相互扶助ヲ目的」として、相談課、事業課、庶務課を設置して安価に生活用品や学用品を生徒に提供しようというものであった。学校側はその趣旨は多としながらも、その組織の膨大なこと、多額の予算を必要とすることを理由に設置を認めなかった。そのため、生徒側は十一月二十五日、文二乙のクラスを中心にして、ストライキにはいった。これに対し、学校側は臨時休校とし、父兄や警察からの圧力もあって、二日間でストライキは収拾した。当時の「生徒課日誌」には、「十一月二十五日新総務共済部否定の経過報告大会を開催し度き旨申し出しが岩口生徒主事よりこれを承認せざる旨申し渡せり。放課後直ちに共済部否決不満生徒を中心として文二乙、文一甲乙丙等その他の者約百名運動場に集合気勢を挙げて騒動す。以上無断にて生徒大会に類するものを形成せり、生徒群は主事室廊下付近に集り喚声を挙ぐ」と、記されているという。ことは、文三乙の調停で生徒側に犠牲者はださぬという条件で妥結したのだが、檀以外にも数名が停学処分になっているのは、相馬論文のとおりである。

檀は校長の車に向って投石したともいうし、学友の一人は、檀が自分の名前をダンイチオ（ダヌンツオのもじりという）とよびながら、雨天体操場で演説したのを記憶しているという[注11]。

事件の経過を表面的にたどるならば、以上のようになるのだが、事件の底流には、社会主義運動の影響があったのも確かなことのようである。直接的には、福岡日日新聞の十一月二十日「九大学生の

生活改善発会式」、同三十日「九大共済部設置問題」の記事に見る如く、九大の共済部設置問題と連動して、福高の共済部設置運動は起こっており、共通した思想的背景があったと判断してよいだろう。

そもそも、福高の社会主義運動については、大正十四年十一月の所謂蜷川事件がもとで、石川淳が仏語講師を退職するのは、周知のことであるが、この事件で、放校二名、退校二名、無期停学六名の処分者をだして以来、表面的には鳴りをひそめていたが、非合法に活動を続けていたらしい。『学而寮史』には次のように述べている。

理論研究と合法の時代であった大正年間に比べ、四年の共済会事件に至る数年間は実践と非合法の時代であった。福高における社会科学研究は大正十五年に完全に非合法の宣告を受け、それ以来表面的には終焉したかに見えるが、根強い研究心と社会改造に対する情熱は単なる研究会開散（ママ）によって断たれるものではなかった。社会科学を志ざす一群の少数学生は種々の合法的団体の蔭にかくれてひそかに運動を続けていた。それらの合法的団体は多分創生会、及新生会で、校友会の文芸関係各部（弁論、演劇、映画）にも可成りの進出を見せていたものと思われる。創生会なる団体が如何なる趣旨の団体であったかは判明しないが創生会先輩の一人が三年春の共産党事件に連座した為、五月八日解散になっている。その後復活したが、新生会と共に常に学校よりの注目を受けている所から察して当時としては左翼的色彩或は左翼に利用されつゝあった団体であると思われる。弁論部に関しては先述した通りであるが、これらの合法的組織の他に地下組織としてS・S会（秘密読書会）なるものがあった。これは四年九月より五年二月二十六日まで続いたが、福高における社会科学の純粋研究団体はこれが最後であろう。

こうした、福高内部の社会主義運動の流れの中で、共済部事件は起こったのであり、学校当局の拒否理由は多分に表面的なものにすぎず、本当の理由は、共済部を通じての社会主義思想の浸透を恐れての拒否であったと思われる。では、福高そのものに左翼的思想を育成する雰囲気があったのかというと、どうも逆であったらしい。同校の創立は大正十一年で、初代校長秋吉音治氏は「深く日本主義を信奉され、国粋的な色彩は濃厚であ」り「その抱懐する教育方針は、『国家に法律ある如く学校にも学則あり。学則を侵すは国法を侵犯するに等し』という言に依つて見る如く、至つて規則を重んじたという。そういう体制の下にあって寮生も「全体としては皆利口な勉強型で個人生活の集団にすぎず、団体としての寮生活たる感じは殆ど」なく「要するに真面目な秀才型が多く情熱型は居なかった」ともいう。[注1-2] 全体としては、こうした雰囲気のなかで、少数の生徒が、「文芸関係各部」に依りながら、活動を続けていたというのが、恐らくは、実情であったのだろう。相馬論文中の資料でも、「昭和四年九月頃左傾生徒ガ短歌会、俳句会（各指導教官アリ）等ノ会員中ニ存在スルコト学校当局ニ於テ察知シ注意中ノ所之等ガ中心トナリ（就中文二乙生徒の一部）」というように、短歌会や俳句会といった、グループが、共済部事件の中心であったと述べている。

「校友会雑誌第十四号」（昭和四年十二月・福岡高等学校校友会発行）に、「青鯉集」（標題に依る。目次では「青鯛集」）「馬酔木集」と題して、各々短歌会と俳句会の作品が掲載されているが、相馬論文中の資料で指摘されている停学処分者の内、今村伊勢次・狩野貞直・井久保健次・石橋弥左衛門の各氏が作品を寄せ、檀も「青鯉集」に「深々と海女はすみ入る海はなぐ藻屑にまじる息のおと

なひ」という短歌を寄せている。

また、先に引用した、福岡日日新聞も十一月二十七日に「共済部設置に関し、福高に一問題」と題して、第一報を載せ、文二乙組を中心として、二十六日よりビラを配る者や協議を始める者が居り、学生集会所亭々舎に百余名が集まっていることを報じている。翌二十八日には、三段抜きで、かなり大きく報じ、「徹宵して、教官会議福高遂に臨時休校」と見出しを掲げ、秋吉校長談話として、なるべく穏便に対処したい為、生徒は明日は登校して欲しい旨の内容を載せている。二十九日には、解決した旨を報じ、夕刊には四名を二週間、三名を一週間の停学処分としたことが述べられ、共済部事件関係の記事は終っている。この処分内容は、相馬論文中の『学生思想事件一覧』処分内容とも一致し、檀がここで、十一月二十八日から十二月四日まで、一週間の停学処分を受けたことは間違いない。

このように福岡日日新聞は、三日間にわたって五回の記事を掲載し、かなり詳しく報道している。こうした詳報の原因は、先にも述べたように九州大学の共済部問題も前後して起っていたように、当時、社会主義関係の事件が相次ぎ、そうした一連のニュースの中で同事件も扱われたためであろう。最も大きな扱いを受けた事件は、前年の所謂三・一五事件である。報道が解禁となった十一月五日付けで特別号外を出し、共産党員の大検挙の模様を報じ、その後も「捕わるゝまで」と題して、福本和夫等の逮捕の様子を連載している。

学生の社会主義運動関係の記事も多く、昭和四年だけに限っても、三月六日「第一高等学校に思想上の軋轢」、九月二十七日「鎮西中学同盟休校騒ぎ」、十月二十六日「九州歯科医専又々紛擾」、十二月十日「姫路高校盟休」、十二月十二日「六高盟休」、等の記事が並んでいる。

昭和四年の十二月の一回目の一週間の停学事件については、ほぼ以上のような経緯であったと考えてよいであろう。

では、次に一年間の停学処分について検討してみたい。

この一年間の停学処分については、檀自身、次のように回想している。[注13]

高等学校の二年から三年に進級する間際のことだから、おそらく、数え年十九歳の春だったろう。私は事に問われて、一ヵ年停学処分になった。この、名目上の、一ヵ年の空白ほど、私にとって、意味のあった時間はほかに無かった。

学生であって、学生でない……。あの、空漠で無為の時間を埋める為にこころみた、或いはこころみざるを得なかった、さまざまの自己形成だけが、僅かに、今日の私に、まっすぐつながった、とさえ云い得るほどである。

具体的には、この一年間の停学処分中に水道工事のアルバイトで得た金をもとに、熊本の宇土半島の破れ寺にこもって、ニーチェ、ショーペンハウエル、佐藤春夫、瀧井孝作、小林秀雄、横光利一等を耽読したという。[注14] この一年間の停学処分は、相馬正一氏も指摘するように、「全集年譜」や、『人物書誌体系2檀一雄』（石川弘編・日外アソシエーツ・1982年5月）でも、共済部事件に関する処分のように書かれているが、相馬論文中の『学生思想事件一覧』に依れば、秘密読書会会員に対する処分である。そして、この『学生思想事件一覧』の内容を裏付けるような新聞記事もある。大阪毎日新聞・西部毎日福岡版の昭和五年三月三十日の記事がそれである。

「マルキシズム研究の学生の秘密結社　果然福岡高校で暴露　学校側七名を処分す」と見出しを付けて、三月初旬福岡憲兵隊が思想問題で隊内の検挙を行った際、福岡高校にマルキシズム研究の秘密結社があることが判明し、学校側は三名を放校、二名を諭旨退学、二

名を無期停学処分にしたというものである。秋吉音治校長の「実に遺憾」と題する談話も付され、処分を受けた生徒の氏名は伏せられているが、「昨年の同盟休校事件の背後にあつて活動した文科二年乙類の学生である」と述べられている。相馬論文中の『学生思想事件一覧』に依ると、処分者七名中、先の共済部事件の処分者と重ならないのは、文一乙の林晴夫氏と文二乙の雪山俊之氏だけであり、檀も含めて、他の五名は、共済部事件でも処分を受けたメンバーである。新聞報道の処分内容と、『学生思想事件一覧』の処分内容には若干の食い違いがあるが、この新聞報道が、檀が一年間の停学になった、「秘密読書会事件」についてのものであることは間違いないだろう。

また、檀と二人、一年間の停学処分となった雪山俊之氏は雪山氏と、檀のみが一年間の停学で済んだ理由を、雪山氏の父である俊夫氏が当時京都大学の独文科の講師であり、檀の叔父の当る古賀毅氏も福岡女子専門学校の校長（これは、多分雪山氏の記憶違いで古賀氏が校長になるのは、昭和一二年八月であるが、教育者であったことに変りない）で、父親の参郎も教育者であったためではないか、と回想している。このような事情を恥じて、檀は意図的にこの間の事情をぼかしているのではないか、というのが雪山氏の意見であるが、[注15] ともかく、檀が昭和五年三月、福高の二年から三年に進級する際に、秘密読書会の会員であった為に一年間の停学処分を受けたのは、ほぼ間違いない。この一年間の停学処分が檀に与えた影響については、先に檀自身の言葉を引用したが、そもそも、檀に社会主義関係の文献を読むことを勧めたのは、一年上級の坪井與氏で、坪井氏も一年の時に左翼関係の事件で、一年間の停学処分を受け、檀と同学年になり、しきりに、檀に左翼関係の文献を読むことを勧めたらしい。[注16] ただ、具体的にどういう文献を読んでいたのかというと判然としない。更に言えば、檀が社会主義思想にどれだけ、理解と共感を示していたのかも判然としないのである。確かに、今まで見てきたように、檀は社会主義関係の事件に関係して二度にわたって、停学処分を受けている。しかも、その内の一度は一年間にも及ぶ停学であった。檀の近親に教育関係者がいなかったならば、退学だったのだろう。こうした先鋭的ともいえる活動家であったことは、間違いないとしても、思想としての社会主義、或いは共産主義にどれほど共感していたのかということになると、疑問が残るのも、また、事実である。

例えば、実質的なデビュー作と目される「此家の性格」（「新人」・昭和八年十一月）にも主人公の父親の小地主が批判的に描かれてはいるが、それは、社会的な視点からの批判というよりも、父親の人格に対する、同じ血縁を持つものとしての子からの批判という色彩の方が強いのである。また、昭和六年の校友会雑誌に発表した「或家の断層」にも、そうした、社会的な視点は見出し難い。檀の、その後の作家活動を考慮に入れても、檀の社会主義思想からの影響という点には、まだ疑問な点が多い。

その他の檀の福高時代の生活の側面を指摘しておきたい。一つは、秋山六郎兵衛氏との関係である。秋山氏が福高にドイツ語教師として赴任したのが大正十五年四月、二十五歳である。昭和四年でも、まだ二十九歳、高校生からみれば、兄のような存在であったろうと思われる。秋山氏は、東大在学中には同じ独文の手塚富雄氏などと共に第九次「新思潮」に参加しており、福高在職中にも文学活動を続けている。例えば、福岡日日新聞にも「文芸と形式―昭和四年文壇の中心問題―」と題して、昭和四年一月十四日から六回にわ

たって評論を連載するなど、活発な文学活動を続けていた。そういう秋山氏の所に文学好きの生徒が、よく集ってきたという。[注17]

学生にしたところで、口ではもちろん先生と呼んでいたが、胸の中では友だちか、せいぜい兄貴と思っていたらしく、そのつもりでよく訪ねてきた。

＜中略＞

わたしが文学をやって小説や評論をときどき中央の雑誌や新聞に発表するのを知っていてか、それらの学生のうちには文学愛好家が多かった。そして学生で文学を愛好するものと言えば当時は大抵相場がきまっていて、怠けものでだらしなく、従って学校当局からは甚だ受けがよくなかったのである。かてて加えて、当時の左翼系の学生の多くが文学研究にことよせてさまざまな秘密集会をやっていたので、この系統の学生もわたしの身辺に接近する傾向があった。わたし自身怠けものでだらしなく文学が好きで、かつどちらかと言えば左翼的な考えをいだいていたのだから、こうなるのは自然の成り行きではあった。要するにわたしの家は学校のブラックリストの観を呈したのである。

更に、秋山氏は共済部事件についても次のように回想している。

まさか全学生を退学させる暴挙には出ないとしても、少なくとも首謀クラスの文乙二年は結局可成りな犠牲者を出すものと思われるが、このクラスはドイツ語が第一語学である関係上わたしも教えて個人的にもよく知っている学生が二三はいたので、こんな学生が犠牲者になるのは可哀そうに思えてならなかった。片山さん（当時九大教授だった片山孤村――引用者注）の長男も確かこのクラスだったと思うし、その他檀一雄君や三高のドイツ語の教授雪山さんの長男俊之君もいたはずである。檀君と雪山君は当時から文学が好きでよくわたしの家へ話しにやってきていたし、学校当局からは決っしていい目では見られていなかったようである。

檀自身も秋山氏には、親近感を持っていたらしく、戦後、檀や北川晃二氏などが中心となって、福岡の南風書房より企画した『新選詩人叢書』の中の一冊に秋山六郎兵衛著の『ハイネ』を計画している。

こうした秋山氏との交遊も檀の福高時代の一側面として指摘しておきたい。

以上、檀の旧制福岡高校時代の伝記的な問題の内、母親との関係と共済部事件と二度の停学処分、並びに秋山六郎兵衛氏との関係について検討してきたが、この時期が檀にとっての疾風怒涛の時代であったことは間違いない。母との再会、社会主義思想との出会と挫折、更に一年間の停学中の佐藤春夫や瀧井孝作を始めとする読書体験。こういうものが、中心となって檀の内面に文学への興味が徐々に形作られていったのである。

福高卒業後、檀は東京帝国大学の経済学部に入学する。経済学とは、およそ檀とは最も似つかわしくない学問であるが、これも、本当は、京都大学の独文科志望であったのを、父親から、東京大学など合格しないだろうと言われ、それへの反発から、選んだという。

檀が「此家の性格」を発表し、古谷綱武を介して、太宰や尾崎一雄と知り会い、佐藤春夫に師事し本格的に作家への道を歩き始めるのは一年後のことである。

注1　「火宅の母の記」（高岩トミ・「新潮」昭和五二年一〇月号後に加筆して、昭和五三年九月新潮社より刊）

注2　「わが青春の秘密」（「小説新潮」昭和三五年一月号～一二月号、昭和五一年四月新潮社より刊）

注3　注1に同じ。

注4　『火宅の母の記』に依れば、母が家を出ようとした時に檀は家に居らず、そのためトミは、ノートを机の上に置いたまま、家を出たという。

注5　檀の福岡高校時代の先輩で文芸部の部長であった古賀杉夫氏に依れば、檀から、在学中母親の話を聞いたことは無く、檀が福高を選んだのは、故郷に近いという理由からであろうとのことである。

注6　注2に同じ。

注7　注2に同じ。

注8　注1に同じ。

注9　注2に同じ。

注10　「檀一雄」（「太宰治」第五号・一九八九年六月）

注11　武富敏治「学生時代の檀一雄」（「能古島通信」第三集檀一雄追悼特集号・昭和五一年六月）

注12　『学而寮史』に依る。

注13　「ニーチェ『この人を見よ』」（「文藝」昭和四一年八月号）

注14　「自筆年譜」（『日本文学全集53坂口安吾・井上友一郎・檀一雄集』筑摩書房・昭和四〇年一一月）

注15　野原一夫「人間檀一雄」（「正論」昭和五八年一一月号～六〇年八月号、後に加筆して、昭和六一年一月新潮社より刊）

注16　注15に同じ。

注17　秋山六郎兵衛『不知火の記』（白水社・昭和四三年一月）

付記　本論作成に当って、檀の福高時代の先輩で文芸部の部長でいらっしゃった古賀杉夫氏に資料等の御教示を頂きました。有難うございました。

――久留米大学附設高校教諭――

二十三号正誤

補訂版『萩原朔太郎全集』「年譜」を見て　國生雅子

五十八頁上段二行目

誤・事実が明を、追跡調査は

正・事実が明らかとなるので、追跡調査は